

第3節 保育士養成課程における英語教育の一考察

—ESP 的アプローチを取り入れて—

カレイラ松崎順子

要約

本研究では、保育士養成課程においてどのような英語教育を行うべきなのかを考察し、保育士養成課程の英語教育に示唆を与えることを目的とする。すなわち、ポートフォリオ学習を取り入れ、保育士養成課程の学生が英語の授業中にどのようなことを難しいと感じながら授業を受けているのか、どのような所に面白さを感じながら授業を受けているのかなどを分析し、「子ども用の英語の歌を歌う活動」および「連絡帳を英語で書く活動」などのESP 的アプローチが学生の学習意欲を促進するものであったかどうかについて検討し、保育士養成課程においてどのような英語教育を行うべきかを検討する。

キーワード

ESP、保育士養成課程、英語教育

1. はじめに

大学生の英語力や英語学習に対する動機づけが低い傾向にあるということは、私立大学における「全入時代」が話題に上がり始めた 2000 年度頃から言われはじめ、さらに学力試験を伴わない「推薦試験・AO 入学試験」の導入により、高校までの学習内容に著しく理解不足のある学生が大量に大学に入学してくる現状が見られるようになった（新沼・中川，2005）。このような急激な学力低下を受けて、大学レベルでの英語教育を再検討する必要が出てきており、リメディアル教育を具現化するための一方策としてポートフォリオ学習を取り入れた試みが行われている（新沼・中川，2005；峰石，2002）。ポートフォリオはいわゆる“ある目的のもとに学習者の作品などを収集したもの”（下，2006，p. 149）であり、欧米の教育分野において、1980 年頃から評価ツール、教授ツールとして用いられようになった（北条・松崎，2007）。新沼・中川（2005）はリメディアル教育として、ポートフォリオ学習を取り入れ、ポートフォリオ学習は学習者自身に学習後の到達度や達成感を鮮明に自覚させ、学習本来の喜びや動機づけを促し、学習態度にも変化を与えると述べている。また、学習者が自己の学習を「振り返る」ことは、学習者の自己分析を促し、自身で学習目標を定め、今後の予定をたてるといった自主性や自立性を育成する利点があるといわれている（川村，2005）。保育士養成課程においても英語が苦手で、英語学習に対する動機づけが低い学生が入学してくることが多い。そのためポートフォリオ学習は、彼らの英語に対する嫌悪感を取り去り、英語を学ぶ喜びを促し、英語学習に対する動機づけを高めるのに有効であろうと考え、保育士養成課程の英語の授業にポートフォリオ学習を取り入れた。

一方、近年保育園に在籍する外国人児童が増加しているため、日本語が話せない父兄と保育士が英語でコミュニケーションしなければならないことがある。また、小学校における英語活動の必修化が正式に決まったことを受け、保育園においても英語教育がより一層行われるようになることが予想できる。現状では外国人講師が英語を教えているところが多いが、外国人講師が必ず

しも児童の扱いに慣れているとも限らないため、英語の歌の指導はCDなどを利用すれば、子どもの扱いの上手な日本人保育士が教えたほうが効果的であるとも考えられる。ゆえに、保育士養成課程の英語の授業においても、将来保育士になったときに役に立つ英語すなわち English for Specific Purposes(ESP)的なアプローチを取り入れていく必要があると言えるであろう。ESPは“それぞれの学問領域や職域においては固有のニーズが存在、そのニーズによって同質性が認知され、異質性も生じてくる。そして、異質性が認知された各専門領域内では『ディスコース・コミュニティー』集団が形成され、その目的を達成しようとする。その場合、各集団の内外において明確かつ具体的目標を持って英語が使用されるという前提に立っている。ESPはその際の言語研究および言語教育”（深山編，2000，p.197）と定義され、言語教育の中心が文学等であることへの反動・反発から1960年代以降に主張されるようになった（堀口，2003）。保育士養成課程におけるESP研究に関しては、大須賀（2006）および森田（1995，1997）が行っている。大須賀はESPを取り入れた英語の授業の実践報告を行っており、その中で保育士養成課程の英語教育にESP的アプローチを取り入れることにより、学生の英語学習に対する動機づけを高めることができたことを報告している。森田は保育に関する英語教材開発の報告およびその教材を使用した授業実践の報告を行っている。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、保育士養成課程においてどのような英語教育を行うべきなのかを考察し、保育士養成課程の英語教育に示唆を与えることである。すなわち、ポートフォリオ学習を取り入れ、保育士養成課程の学生が英語の授業中にどのようなことを難しいと感じながら授業を受けているのか、どのような所に面白さを感じながら授業を受けているのかなどを分析し、「子ども用の英語の歌を歌う活動」および「連絡帳を英語で書く活動」などのESP的アプローチが学生の学習意欲を促進するものであったかどうかについて検討することである。

以下の2つのリサーチ・クエスチョンを設定した。

リサーチ・クエスチョン（RQ）

RQ1. 保育士養成課程の学生は、「子ども用の英語の歌を歌う活動」をどのように感じながら行っていたのであろうか。

RQ2. 保育士養成課程の学生は、「連絡帳を英語で書く活動」をどのように感じながら行っていたのであろうか。

3. 研究の方法

(1) 研究参加者及び授業内容

2008年4月から7月までの3ヶ月間、私立大学の保育士養成課程の1年生35名の英語のクラス（週1回90分・全15回）において、ノート作成や振り返りシート作成を行った。新沼・中川（2005）や川村（2005）などの先行研究で紹介されている方法に基づき、毎時間、自身の学習に対する「振り返り」を行い自己の現状を常に認識し、毎回の授業で何を学んだかを確認させるために、学生は「振り返りシート」を書いた。本研究においては、「振り返りシート」作成がポートフォリオ学習の主たる活動になる。学習した内容をすべて記載し、それに対する感想を書くよ

うに指示した。

さらに、卒業後のことを考え、授業の中に保育士養成課程における ESP 的要素を取り入れた。具体的には、将来保育園児に英語を教えることがあると想定し、マザーグースの英語の歌を毎回の授業の中に 10 分程度取り入れた。授業で扱った歌は、*Head Shoulders Knees And Toes; Hickory dickory dock!; Hmpty Dunpty; I had a little nut tree; If you're happy and you know it; Itsy Bitsy Spider; London Bridge is falling down; Mary had a little lamb; Old MacDonald had farm; Peas porridge hot; Row, row, row your boat; Ten little Indian; Twinkle, twinkle, little star* の 13 曲である。また、学生の中には、保育士が英語を使う必要はないと考えている学生も多いため、彼らの意識を高めるために、保育園には外国人籍の児童が在籍していることがあり、父兄が日本語を理解できない場合は、世界の共通語である英語でコミュニケーションを行う必要があることを説明し、補助教材として連絡帳を英語で書くためのプリントを配布し、最初に著者が必要な語句や表現の説明を行い、その後各自が連絡帳を英語で書く活動を行った。

(2) 分析方法

① ポートフォリオ

「振り返り」の記録をデータとして取り上げ、各学習者の学習に対する内省について、「子ども用の英語の歌を歌う活動」および「連絡帳を英語で書く活動」の 2 つにわけて分析した。

② 質問紙

15 週目の授業の最後に、以下のような質問紙調査を行った。

1) ARCS 動機づけモデルによる評価

保育士養成課程に ESP 的アプローチを取り入れた授業が、学習意欲を促進するものであったかどうかを調べるために学習者評価を検討した。ARCS 動機づけモデルの研究を行っている鈴木 (1995) を参考にし、8 項目 (子ども用の英語の歌に関する 4 項目・連絡帳に関する 4 項目) を作成した (付録 1 を参照)。回答は「あてはまる」(4 点)、「まあまああてはまる」(3 点)、「あまりあてはまらない」(2 点) および「あてはまらない」(1 点) の 4 件法を採用した。質問紙の各項目に対して保育士養成課程の学生がどのような考えを持っているのかをより明確にするため、4 段階尺度形式を「あてはまる」「あてはまらない」の 2 段階に変換し、再集計した上で χ^2 検定を行った。

なお、ARCS 動機づけモデルは、学習意欲を「注意」(Attention)、「関連性」(Relevance)、「自信」(Confidence)、「満足感」(Satisfaction) の 4 側面からとらえ、学習者のプロフィールや学習課題／環境の特質に応じた意欲喚起の方略を系統的に取捨選択して教材に組み入れていこうとするものであり (鈴木, 1995)、Keller (1983) によって提唱された。鈴木 (1995, p. 53) は ARCS 動機づけモデルの 4 側面を以下のように解説している。

ARCS モデルにしたがって学習意欲の要因をたどると、まず、面白そうだ、何かありそうだという注意の側面 (A) にひかれる。次に、学習課題が何であるかを知り、やりがいがありそうだと、自分の価値とのかかわりがみえてきたという関連性の側面 (R) に気づく。課題の将来的価値のみならず、プロセスを楽しむという意義も関連性の一側面である。一方で、学習に興味を見い出しても、達成への可能性が低い、やっても無駄だと思えば意欲を失う。逆に、初期に成功の体験を重ね、それが自分の努力に帰属できれば「やればできる」という自信の側面 (C)

が刺激される。学習を振り返り、努力が実を結び「やってよかった」との満足感 (S) が得られれば、次への意欲につながっていく。

2) 自由記述式の質問紙

「振り返りシート」に関して感想を書く自由記述の欄を設けた。質問項目は「振り返りシートについての感想を自由に書いてください」である。

4. 結果および考察

1. 保育士養成課程の学生は、「子ども用の英語の歌を歌う活動」をどのように感じながら行っていたのであろうか。

(1) 質問紙による評価

表1から、「子ども用の英語の歌を歌う活動」の各項目の平均値はすべて2.66から3.22の範囲〔回答は4段階尺度であり、「あてはまる」(4点),「まあまああてはまる」(3点),「あまりあてはまらない」(2点),および「あてはまらない」(1点)と得点化した〕であり,「子ども用の英語の歌」を取り入れた授業が,全体的に見て学習者にとって魅力的なものであったと推察できる。さらに, χ^2 検定の結果,5%水準で有意に「あてはまる」と評価した人数に偏りが見られた項目は,項目1「英語の歌うことは楽しかった」,項目2「英語の歌を歌うことはやりがいがあった」,および項目4「英語の歌を歌うことによって満足感が得られた」であった(表2を参照)。「あてはまらない」と回答した人数より,「あてはまる」と評価した人数が多く,それゆえに,本研究に参加した学生は子ども用の英語の歌を取り入れた授業を楽しく,やりがいがあり,満足感が得られた学習活動であったと,ARCS動機づけモデルの観点から肯定的に評価していたといえるであろう。

表1 「子ども用の英語の歌を歌う活動」に関する4項目の平均値および標準偏差

	平均値	標準偏差
項目1	3.22	0.79
項目2	2.97	0.78
項目3	2.66	0.83
項目4	2.87	0.67

表2 「子ども用の英語の歌を歌う活動」に関する4項目の χ^2 検定結果

	4段階尺度を2段階尺度に変換し 集計した結果		χ^2 検定 結果
	あてはまらない	あてはまる	
項目1	3	29	21.13 **
項目2	6	26	12.50 **
項目3	14	18	0.50
項目4	7	24	9.32 **

** $p < .01$

(2) 「振り返りシート」の記載内容の分析

「振り返りシート」の記載内容のうち歌に関して記述された部分を2つのグループに分類し、いくつかの回答例を示した。

「楽しい」33名

- 歌と踊りは楽しかったです。
- 英語の歌は、楽しいのでもっと完璧に歌えるようにしたい。
- 歌の練習は楽しいのでもっと時間をとってもらいたいと思った。
- 歌は楽しく歌えました。
- 歌遊びは聞き取りがまったくできなかったけれど、歌いながら遊ぶのはとても楽しかった。
- すこしドキドキしたけど、楽しく歌うことができました。
- 歌は楽しく英語に触れる事ができるので、これからも続けてほしいです。
- 英語の歌に合わせて手遊びをしました。歌の内容よりもリズムを感じて動く簡単なものだったので小さい子供でもすぐ覚えられると思いました。ただ文法を習うよりも楽しく授業に参加できるので良いと思います。

「難しい」5名

- 英語の歌は単語ひとつひとつを言っているとリズムに合わなくて難しかったです。
- 歌は英語の歌詞を普通に読むだけじゃリズムに合わなくて難しかったです。

その他以下のような意見も記載されていた。

- これからも忘れないように口ずさんでいきたいと思います。そして将来、子どもたちに教えられるようにしたいです。

「振り返りシート」の記載内容からも「楽しい」という記述が最も多く見られ、参加した学生は子ども用の英語の歌を楽しんで歌っていたことがわかる。以上のことから、「子ども用の英語の歌を歌う活動」は学生の学習意欲を促進する上で効果が認められたと考えられる。ゆえに、「子ども用の英語の歌を歌う活動」を保育士養成課程の英語の授業に積極的に取り入れていくことを示唆できる。

2. 保育士養成課程の学生は、「連絡帳を英語で書く活動」をどのように感じながら行っていたのであろうか。

(1) 質問紙による評価

「連絡帳を英語で書く活動」の各項目(項目5~8)の平均値は2.39から2.68の範囲〔回答は4段階尺度であり、「あてはまる」(4点),「まあまああてはまる」(3点),「あまりあてはまらない」(2点),および「あてはまらない」(1点)と得点化した〕であり、「子ども用の英語の歌を歌う活動」と比べてもかなり低くなる(表3を参照)。

さらに、 χ^2 検定の結果、5%水準で有意な項目はなかった(表4を参照)。これらのことから、本研究参加者は「連絡帳を英語で活動」をARCS動機づけモデルの観点から肯定的にも否定的にも評価していないことがわかる。

表3 「連絡帳を英語で書く活動」に関する4項目の平均値および標準偏差

	平均値	標準偏差
項目1	2.68	0.94
項目2	2.68	0.86
項目3	2.39	0.79
項目4	2.68	0.82

表4 「連絡帳を英語で書く活動」に関する4項目の χ^2 検定結果

	4段階尺度を2段階尺度に変換し 集計した結果		χ^2 検定 結果
	あてはまらない	あてはまる	
項目1	12	16	0.57
項目2	12	16	0.57
項目3	16	12	0.57
項目4	13	15	0.14

(2)「振り返りシート」の記載内容の分析

「連絡帳を英語で書く活動」に関して記述された回答を、6つのグループに分類し、いくつかの回答例を示した。

勉強がもっと必要・もっとできるようになりたい 13名

- もう少し読み書きができるようになるように勉強しようと思った。
- まったく出来なかった。もっと勉強しなければならないと思った。

難しい・大変 10名

- 英語で連絡帳を書くのは大変だと思った。
- 英語はやっぱり難しいと思いました。
- 連絡帳は日本語でも書くだけでも大変そうなのに、英語で書くのはもっと難しい。

英語の必要性を理解できた 6名

- 子どもと関わる仕事で初めて英語の必要性を感じた。
- 今回の授業で保育における英語の大切さと必要性を理解することができました。
- 保育士に英語が必要なことがわかったので、好きになるように努力したいです。
- 今まで外国人の保護者がいるということはまったく考えていませんでした。こういうときのためにやはり英語は必要だと思いました。全くできない自分にあせりを感じます。英語をしっかりとやらなければ。

楽しい 3名

- 自分で書く手紙は難しくして解くのに大変でしたが、でも楽しかった。外人に英語が通じたらうれしいです。
- 今日は面白かった。文章を作る作業がとても楽しい。こういう授業がやりたかった。

不安 3名

- 将来子供を一人一人しっかり見て親に連絡帳を書いていくことでさえ大変だと思ったのに、

英語で書くことになったら不安で仕方がない。

- 英語の連絡帳を書かなければならないなんて将来がちょっと不安になった。

その他以下のような意見も記載されていた。

- 新しいアルバイト先の託児所には日本人の子供が少なくほとんどがアメリカ人や中国人の子供。今日やった内容はとても役に立つと思った。
- 将来いつか使うときがあるかも知れないので、今回勉強できて良かったです。
- 将来ひょっとしたら外人の子を受け持つ可能性がないわけではないので参考にしようと思います。

以上の結果から、本研究に参加した学生は「連絡帳を英語で書く活動」を「楽しかった」「やりがいがあった」「自信がついた」「満足感が得られた」とはあまり感じていないが、「振り返りシート」の記載内容から「連絡帳を英語で書く活動」により保育園での英語の必要性を理解できたと感じ、もっと英語ができるようになりたいと思ったことがわかる。さらに、上記のように「新しいアルバイト先の託児所には日本人の子供が少なくほとんどがアメリカ人や中国人の子供。今日やった内容はとても役に立つと思った」「将来いつか使うときがあるかも知れないので、今回勉強できて良かったです」という記述も見られたことから、「連絡帳を英語で書く活動」は保育士養成課程の学生に英語学習の必要性を理解させるのに適切な活動であったといえるであろう。ただし、「連絡帳を英語で書く活動」を難しいと感じている学生も多かったことから、指導方法および内容を検討する必要があるであろう。

5. おわりに

参加した学生の人数が35名であることから、本研究の結果を一般化できない。また、本研究に参加した学生の英語力がどの程度向上したかということは本研究からわからない。しかし、本研究から保育士養成課程の英語教育においてどのような英語の授業を行うべきなのかのいくつかの有益な示唆は得られたと思われる。第一に、参加した学生は子ども用の英語の歌を歌う活動を楽しんでいたことから、今後保育士が英語教育に携わる可能性があることを考慮すると、保育士養成課程の英語の授業では、子ども用の英語の歌を積極的に取り上げていくことを示唆できる。第二に、多くの保育園に外国人児童が在籍していることを考えると、連絡帳を英語で書けるようになることは保育士にとって必要なことであり、「連絡帳を英語で書く活動」は保育士養成課程の学生に英語学習の必要性を理解させるのに適切な活動であるといえるであろう。しかし、「連絡帳を英語で書く活動」は彼らにとってかなり難しかったことから、保育士養成課程においてはまず基礎的な英文法の力をつける必要がある。そのうえで適宜、英語で連絡帳を書くような活動を取り入れていくことを提案できる。

外国人児童が多く在籍するようになった日本において保育士養成課程の英語教育も学生のレベルと社会のニーズを考慮しながら行っていかなければならない。今後は保育士養成課程の英語教育の改善のために、授業での実践、教材の作成、保育の現場での調査などを多角的に行っていく必要があると思われる。

6. 参考文献

- 大須賀直子(2006). 保育者養成校における ESP アプローチの実践とその効果の検証 秋草学園短期大学紀要, 23, 1-14.
- 川村千絵(2005). 作文クラスにおけるポートフォリオ評価の実践—学習者自己評価に関するケーススタディー— 日本語教育, 125, 126-135.
- 下 絵津子(2006). 第二言語教育におけるポートフォリオの活用 宮崎公立大学人文学部紀要, 14, 149-167.
- 鈴木克明(1995). 『魅力ある教材』設計・開発の枠組みについて—ARCS 動機づけモデルを中心に— 教育メディア研究, 1, 50-61.
- 新沼 史和・中川 武 (2006). 大学・短期大学におけるポートフォリオ学習を用いた英語教育 高知学園短期大学紀要, 36, 17-35.
- 深山晶子編(2000). ESP の理論と実践 三修社.
- 堀口和久(2003). ESP と経済英語・ビジネス英語— 大学英語教育の観点から— 帝京大学 文学部紀要教育学, 28, 145-164.
- 峯石 緑(2002). 大学英語教育における教授ツールとしてのポートフォリオに関する研究 溪水社
- 森田和子 (1995). 保育科の英語教材として見る「保育現場」(I): 教材開発 横浜女子短期大学研究紀要, 10, 81-98.
- 森田和子(1997). 保育科の英語教材として見る「保育現場」(II): 授業実践 横浜女子短期大学研究紀要, 12, 35-54.
- Keller, J. M. (1983). Motivational design of instruction. In C.M. Reigeluth(Ed.), *Instructional-design theories and models: An overview of their current status*. Lawrence Erlbaum Associates, U.S.A.

注

本稿は Annual Report of JACET-SIG on ESP, Volume 11, 22-30. に掲載されている。

付録

1. 英語の歌を歌うことは楽しかった
2. 英語の歌を歌うことはやりがいがあった
3. 英語の歌を歌って自信がついた
4. 英語の歌を歌うことによって満足感が得られた
5. 保育園の連絡帳を英語で書く活動は楽しかった
6. 保育園の連絡帳を英語で書くことはやりがいがあった
7. 保育園の連絡帳を英語で書くことによって自信がついた
8. 保育園の連絡帳を英語で満足感が得られた